

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2017.12) 平成29年度:3-4.

看護学生の出産・陣痛に関する意識

川畑 菜波, 佐々木 亜湖

# 看護学生の出産・陣痛に関する意識

学生氏名 川畑菜波 佐々木亜湖  
(指導：伊藤幸子 野原樹里)

## 緒言

出産方法は、妊婦の主体性が尊重され、そのニーズに沿って決定できる。陣痛対処法についても、無痛分娩や呼吸法など様々な選択肢がある。しかし、我々は陣痛に耐えることが母親になる通過点であるという伝統的な考えを持つ友人の話を聞く機会があった。吉田(2010)も、痛い思いをして産む子だから愛情を注げると話す人がいたことを報告しており、現代の若年女性は、「陣痛に耐える出産」を意識しているのか疑問を持った。

谷津ら(2016)は20代女性の出産意識に関する研究で、対象の約半数が出産に現実味を感じていないと報告している<sup>2)</sup>。しかし、看護学生は講義・実習を通して妊娠・出産を考える機会があると予想される。そこで、若年女性である看護学生の出産・陣痛に関する意識を明らかにすることを目的として調査を行った。

## 方法

**研究対象：**A大学看護学科の女子学生1~4学年を対象とした。

**データ収集方法：**調査期間は平成29年8月23日~9月8日であった。無記名自記式質問紙と回収用封筒を配布し、留め置き法で実施した。回収は本人が密封し、鍵付きメールボックスへ投函してもらった。調査票の回答をもって同意が得られたものとした。

**調査内容：**対象者の基本属性と、先行研究を参考に独自に作成した出産・陣痛の意識に関する質問26項目(6段階リッカート法、1:非常にそう思う~6:全く違う)、花沢<sup>3)</sup>の母性理念質問紙27項目(2:非常にそう思う~2:非常にちがう)を用いた。

**データ分析方法：**単純集計し、基本属性は $\chi^2$ 検定を行った。出産・陣痛に関する意識と母性理念の回答は1,2年生と3,4年生で2群比較した(Mann-WhitneyのU検定・t検定)。有意水準は5%未満とした。

**倫理的配慮：**対象者には研究の目的及び方法を口頭・書面で説明した。また、研究参加は自由意志であり、不参加でも不利益を被らないこと、匿名性の確保・データの取り扱いに配慮し、終了後はデータを破棄することを説明した。

## 結果・考察

199名に配布し、回収は162名(81.4%)、有効回答は153名(1年37名,2年73名,3年39名,4年34名)、有効回答率は94.4%であった。

### 1. 対象者の基本属性

平均年齢は20.1歳(±1.3)であった。妊娠・出産経験は全員がなかった。弟妹がいる人は84名で、5歳以上年齢差があると回答した人は31名(20.3%)であった。その他の基本属性は表1

に示した。

表1 その他の基本属性

項目	あると答えた割合(%)		p値
	1,2年	3,4年	
中高生時代の赤ちゃんふれあい体験	18.8	13.7	.399
大学入学後の未就学児ふれあい体験	56.3	78.1	.004
知人の出産立ち合い体験	5.0	4.1	.792
実習での出産立ち合い体験	1.3	38.4	.000
出産場面がある絵本を読んだ	38.8	30.1	.263
出産場面がある小説を読んだ	61.3	49.3	.138
出産場面の映像を見た	91.3	98.6	.041
母親から出生時の話を聞いた	85.0	87.7	.632
知人から出産体験談を聞いた	31.6	43.8	.121
ライフプランを考えたことがある	91.3	89.0	.646
子供を産む想像をしたことがある	81.3	84.9	.545

は有意差あり

$\chi^2$ 検定

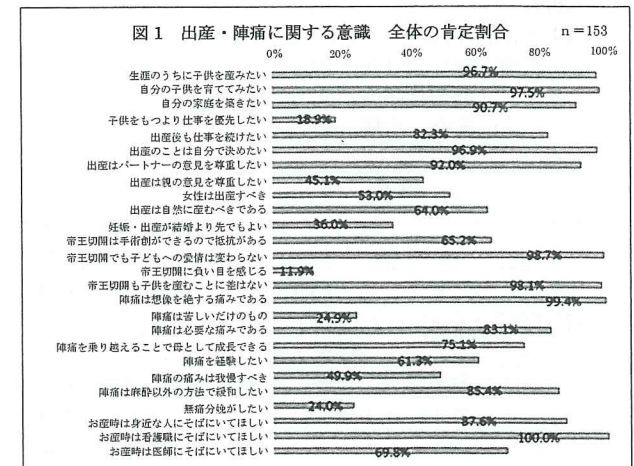
全体に体験が少なかったのは「中高生時代の赤ちゃんふれあい体験」「知人の出産立ち合い体験」の2項目であった。弟妹がいる人は半数を超えていたが、教育としてのふれあい体験の機会は少なかったと考える。また、知人の出産立ち合い経験が少ないのは、対象がまだ学生であることが影響していると考えられる。

1,2年と3,4年間で有意な差がみられたのは「大学入学後の未就学児ふれあい体験」「実習での出産立ち合い体験」「出産場面の映像を見た」の3項目で、小児・母性看護学の講義・実習を経験したことが影響し、3,4年生に多い結果となったと考える。

自分のライフプランや出産をイメージしたことがある人は、全体で8割を超えていた。本研究の対象は看護学科の学生であり、発達心理学や生命科学、小児・母性看護学などの講義が、自分の将来を考えるきっかけとなったのではないかと推測する。

### 2. 出産・陣痛に関する意識

出産・陣痛の意識について肯定的に回答した割合を図1に示す。



出産・育児をしたいと回答する人が多く、出産より仕事を優先したいと回答する人は2割未満であった。これは、自身のライフプラン・出産をイメージしたことがある人が多いことが影響していると考えられる。一方、出産後は仕事を続けたいと回答した人が多かった。これは、対象が看護学生で、専門職者として仕事を続けることを想像しているためだと考える。

出産に関する意思決定は、自分とパートナーの考えを重要視する人が多かった。妊娠・出産時にはパートナーと自分という「新しい家庭」のイメージが築かれているのではないかと考える。

女は出産すべき、自然に産むべきの2項目では肯定的回答が多く、妊娠・出産は結婚より先でよいという項目で肯定的回答は4割未満であった。これは、出産・育児をしたいと回答した人が多いことから、女性に備わる生殖性を発揮したいという考えをもっているのではないかと推測する。また、自分の家庭を築きたいと考えている人が多く、安定した家庭を持つには結婚後に妊娠・出産したほうが良いと感じている人が多いと考える。

帝王切開については、出産方法への負い目はなく、子供への愛情も変わらないという人が多いが、術前に抵抗を示す人もいた。これは、単に母親として子供を産むだけでなく、若年女性としてボディイメージを重要視している可能性がある。

陣痛に関して、想像を絶する痛みと答える人が多かったが、苦しいだけのものではなく、意義や価値を見出す人が多い傾向にあった。

1,2年・3,4年間で有意な差がみられた項目を表2に示す。

表2 出産・陣痛に関する意識 有意差が見られた項目

項目	平均ランク	有意差
陣痛を経験したい	1,2年生 84.03 3,4年生 69.29	p=.034
麻酔以外で陣痛を緩和したい	1,2年生 85.31 3,4年生 67.89	p=.011
無痛分娩をしたい	1,2年生 70.54 3,4年生 84.08	p=.047

陣痛を経験したい、麻酔以外で陣痛を緩和したいという2項目では3,4年生が肯定的であった。無痛分娩をしたいという項目は1,2年生が肯定的であった。これは、3,4年生は母性看護の講義・実習を通して陣痛の対処法・緩和法について学んでおり、対処法をイメージしやすいためだと考える。また、吉田(2005)は陣痛イメージについて、看護学生は一般学生より分娩立ち会い経験があり、陣痛の痛みは苦痛だが乗り越えられることを認識したのではないかと述べている<sup>4)</sup>。本研究においても同様のことが考えられ、陣痛を経験したいとする人が多かったと考える。一方、1,2年は陣痛に対する知識がなく、痛みだけが強調され、無痛分娩を希望する人が有意に多かったと考える。

### 3. 母性理念

伝統的な母親役割を肯定・否定する項目を1,2年・3,4年で2群比較し、特に得点が高い・低い項目と有意差があった項目を表3に示した。

肯定項目で高得点であったのは、妊娠は女に

表3 母性理念質問紙 高得点・低得点、有意差あり項目

肯定項目	1,2年	3,4年
妊娠は、女にとってすばらしい出来事である	1.3	1.4
赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である	1.4	1.3
どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである*	-0.3	-0.8
子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる	1.4	1.3
子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	-1.0	-1.2
(否定項目)	1,2年	3,4年
妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである	-1.5	-1.4
育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である	1.4	1.5

t検定 \*...p<.05

とってすばらしい出来事、女の特権、出産・育児は自分の成長につながるの3項目であった。低得点だったのは出産・育児をしなければ女に生まれた甲斐がないという項目であった。否定項目で高得点(即ち、伝統的母親役割を否定している)であったのは、育児は夫も分担すべき仕事であった。低得点の項目は、妊娠した姿はみじめであった。

出産・陣痛に関する意識の結果と同様に、両群とも女性の生殖性や妊娠・出産、育児に対し肯定的な感情を持っていると考える。しかし、それだけが女性の人生の全てではないとも考えていると推測する。また、夫の育児参加については全体的に高得点で、男性・父親にも役割があると感じており、男性の育児休業が制度化され、話題になっていることも影響していると考えられる。

1,2年と3,4年で得点に差がみられたのは母乳で育てるべきの項目で、3,4年生が有意に否定的だった。母乳育児が広く推奨され、母子にとって大切なことではあるが、3,4年は母性看護学の講義や実習で、母乳育児に固執するより母子関係の形成や母子の個別性が重要であると学んでいることが影響していると考えられる。

### 結論

看護学生の出産・陣痛に関する意識を調査した結果、出産に対して、全体に肯定的な感情を持っていた。自分自身のライフプランや出産を想像したことがある人が多く、看護学生として生命科学や発達心理学などを履修したことが影響したと考える。陣痛については、これまでの学習で対処法を学んだ3,4年が陣痛は乗り越えられるものと捉え、経験したいと考える人が多かった。

したがって、妊娠・出産において女性がニーズに合わせた選択をするためには、若年のうちからライフプランを想像したり、自分自身の妊娠・出産について学んだりする機会を持つことが必要である。

### 引用文献

- 1) 吉田和枝.(2010).産痛の「受容」と「回避」に関する医療提供者と医療消費者の態度.母性衛生,第51巻1号,99-110.
- 2) 谷津裕子 芥川有理 佐々木美喜 千葉邦子 新田真弓 濱田真由美 山本由香.(2016).20代女性の出産イメージの特徴.日本助産学会誌,30(1),57-67.
- 3) 花沢成一.(1992).母性心理学.医学書院,240.
- 4) 吉田和枝.(2005).青年期女性の持つ陣痛イメージと産痛緩和方法についての意識に関する研究.母性看護,第36回,59-61.